

校歌 永遠の幸（札幌農学校校歌）

有島武郎君 作歌

- 一 永遠の幸 朽ちざる誉 つねに我等がうへにあれ
よるひる育て あけくれ教へ 人となしし我庭に
イザイザイザ うちつれて 進むは今ぞ
豊平の川 尽きせぬながれ 友たれ永く友たれ
- 二 北斗をつかん たかき希望（のぞみ）は 時代（とき）を照らす光なり
深雪（みゆき）を凌ぐ清き節操（みさを）は 国を守る力なり
イザイザイ うちつれて 進むは今ぞ
豊平の川 尽きせぬながれ 友たれ永く友たれ
- 三 山は裂くとも 海はあすとも 真理正義おつべしや
不朽を求め 意気相ゆるす 我等丈夫（ますらを） 此にあり
イザイザイザ うちつれて 進むは今ぞ
豊平の川 尽きせぬながれ 友たれ永く友たれ

水産放浪歌

前口上

富貴名門の女性に恋するを純情の恋と誰がいうぞ。

暗鬼紅灯の巷に彷徨う女性に恋をするを不情の恋と誰がいうぞ。

雨降らば雨降るもよし 風吹かば風吹くもよし

月下の酒場にて媚を売る女性にも純情可憐なる者あれ。

女の膝枕にて一夜の快樂を共に過さずんば人生夢もなければ恋もなし。

響く雷鳴 握る舵輪 睨むコンパス六分儀、吾等海行く鷗鳥さらば歌わん哉

吾らが水産放浪歌

- 一 心猛くも鬼神ならず、男と生れて情はあれど
母を見捨てて浪越えてゆく
友よ兄等よ何時また会わん
- 二 朝日夕日をデッキに浴びて、続く海原一筋道を
大和男子が心に秘めて
行くや万里の荒波越えて
- 三 波の彼方の南氷洋は男多恨の身の捨てどころ
胸に秘めたる大願あれど
行きて帰らじ望みは待たじ

都ぞ弥生（明治四十五年寮歌）

前口上

吾等が二年を契る絢爛のその饗宴はげに過ぎ易し。

然れども見ずや穹北に瞬く星斗永久に曇りなく、

雲とまがふ万朶の桜花久遠に萎えざるを。

寮友よ徒らに明日の運命を歎かんよりは榆林に篝火を焚きて、

去りては再び帰らざる若き日の感激を謳歌はん

横山芳介君作歌

赤木頭次君作曲

一 都ぞ弥生の雲紫に 花の香漂ふ宴遊の筵

尽きせぬ奢に濃き紅や その春暮ては移らふ色の

夢こそ一時青き繁みに 燃えなん我胸想ひを載せて星影冴かに光れる北を

人の世の 清き国ぞとあこがれぬ

二 豊かに稔れる石狩の野に 雁 遙々沈みてゆけば

羊群声なく牧舎に帰り 手稲の嶺 黄昏こめぬ

雄々しく聳ゆる楡の梢 打振る野分(のわき)に破壊(はえ)の葉音の

さやめく薨に久遠の光り

おごそかに 北極星を仰ぐ哉

三 寒月懸れる針葉樹林 櫛の音凍りて物皆寒く

野もせに乱るる清白の雪 沈黙の暁霏々として舞ふ

ああその朔風飄々(ひょうひょう)として 荒(すさ)ぶる吹雪の逆巻くを見よ

ああその蒼空 梢聯(つら)ねて

樹氷咲く 壮麗の地をここに見よ

四 牧場(まきば)の若草陽炎燃えて 森には桂の新緑萌(きざ)し

雲ゆく雲雀に延齡草の 真白(ましろ)の花影さゆらぎて立つ

今こそ溢れぬ清和の陽光(ひかり) 小河の潯(ほとり)をさまよひゆけば

うつくしからずや咲く水芭蕉

春の日の この北の国幸多し

五 朝雲流れて金色(こんじき)に照り 平原果てなき東(ひんがし)の際(きわ)

連なる山脈(やまなみ) 冷瓏として 今しも輝く紫紺の雪に

自然の藝術(たくみ)を懐(なつかし)みつつ 高鳴る血潮のほとばしりもて

貴(たふ)とき野心の訓(をし)へ 培ひ榮え行く 我等が寮を誇らずや